２）阪神北地域

日　　時：平成16年６月６日（日）　10：00～13：00

会　　場：宝塚市西公民館／ホール

テ ー マ：「復興10年で、被災地ができたこと、できなかったこと、
将来に生かしていくべきことは？」

１０：００　はじめに
（５分）　・あいさつ、趣旨説明

１０：０５　ステップ０：「ワークショップとは？」
（20分）　・ワークショップの進め方
・アイスブレーク（自己紹介）

できるだけ簡単に

１０：２５　ステップ１：「10年間を振り返って」
（40分）

被災地が　・震災後10年間でできたこと、できなかったこと

１１：０５　班別発表
（10分）　・各班２分ずつ

主体感覚が大切！
『あなたが県民として』

１１：１５　～休憩～
（10分）

各班から１人ずつ
代表者を選出する

１１：２５　ステップ２：「将来に向けて」
（40分）

ステップ１の整理
（40分）

被災地が
・将来に向けて生かすべきこと
・世界に向けて発信していくべきこと

１２：０５　班別発表
（10分）　・各班２分ずつ

１２：１５　～休憩～
（５分）

１２：２０　ステップ３：「まとめ」
（35分）　・各班の成果を整理

・重要だと思う別々の
島にシールを貼る

１２：５５　最後に
（５分）　・総括ワークショップの案内と代表者の決定

・各班２人ずつ

１３：００　終了

・阪神北地域ワークショップの様子

会場の宝塚市西公民館外観

まずはアイスブレークで自己紹介

カードの意見を発表しながらパソコンに入力

ステップ１でまとめた内容の各班からの発表

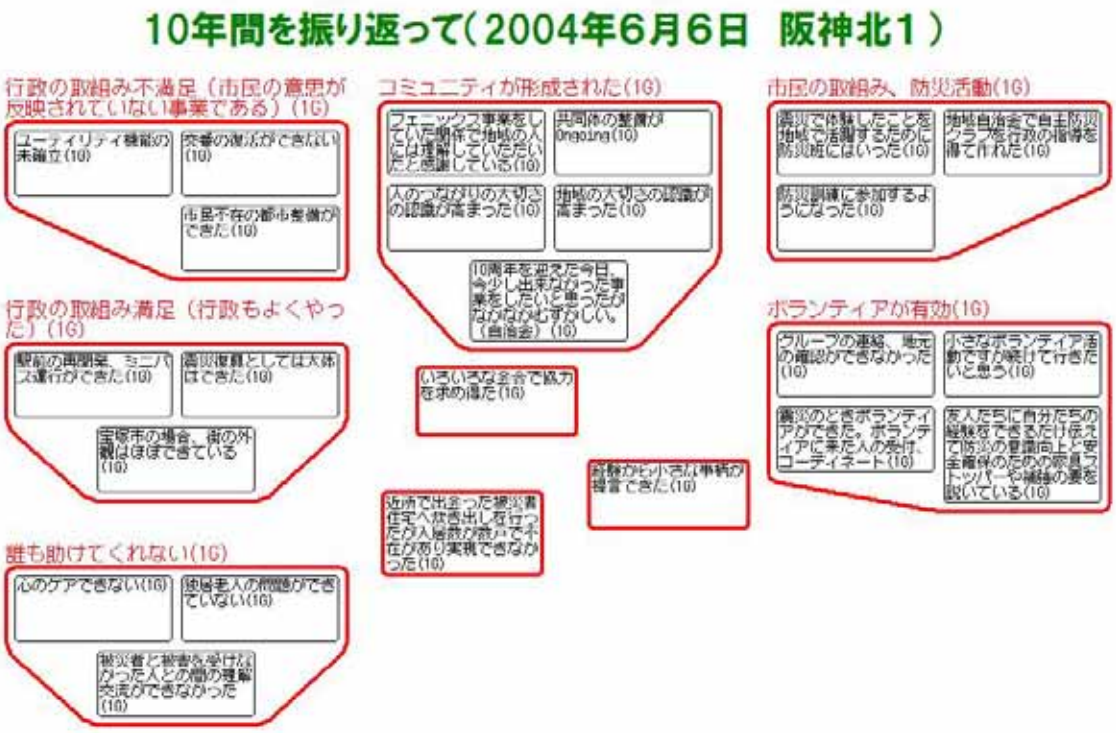
ステップ２と同時並行でステップ１のまとめ

ステップ２についても各班から発表

ステップ２は全員でまとめを行った

丸シールを使ってまとめた意見に順位付け

・ステップ１：各班のまとめ



10年間を振り返って（2004年6月6日　阪神北３）

- 危機（災害時）意識が高まる（3G）

バリアフリー住宅の実践ができた（3G）
- バリアフリーの住宅などがふえた（3G）
- バリアフリー住宅への関心と実施（3G）

震災前からの防災意識が高かったので再開発事業に活かせた（3G）
- 再開発ビルの運営会社を順調に行っています（3G）
- 自宅を全壊認定被害でしたが復興し保存しています（3G）
- 震災被災地の赤羽駅前震災復興一号として再開発ビルを後世として完成しました（3G）

ボランティア活動ができた（3G）
- ボランティア活動ができた（3G）
- 災害後、自分として、ボランティア活動に関わることができ自己実践に向けて頑張ってこれた（3G）
- 被災者住宅の高齢者への支援ができた（3G）

地域住民間の関心が深まった（3G）
- 自宅の周りの付き合いが増えた（3G）
- 住民の地域への関心が高まった（3G）
- 地域、街つくり、隣人との付き合いが深まった（3G）
- 被災者への料理、手芸、踊り等々会を持つ（3G）

インフラ整備ができた（3G）
- 仮設住宅の解消ができた（？）（3G）
- 阪急伊丹駅の復旧ができた（3G）
- 道路、建物の整備ができた（3G）

震災の記憶が風化しつつある（3G）
- 高まったボランティアネットワークが沈静しつつある（3G）
- 忘れている人が結構多いのでは（3G）

景気回復ができない（3G）
- 景気回復ができなかった（3G）
- ハード面はできましたが営業面では大変です。苦戦しています（3G）

心のケアが不十分である（3G）
- 心のケアについて（特に子供、高齢者に）対して不足（3G）
- 地震に対する恐怖心がなくならない（3G）
- 被災者の方々の心のケアが大きく支援が充分にできなかった（3G）
- 被災者の応援（心のケア）が充分にできなかった（3G）

10年間を振り返って（2004年6月6日　阪神北４）

連絡、連携が今後の課題である（4G）
- 行政や関係機関そしてボランティアなどの連携ができなかった（4G）
- 連絡網が出来ない（4G）

新たなグループを立ち上げた（4G）
- 女たちの阪神大震災を考える会を立ち上げた（4G）
- 心のケアの為のコンサートが出来た（継続中）（4G）
- 忘れないで震災ということでメモリアル植樹出来た（4G）

地域活動の再生ができた（4G）
- 自治会活動に参加した（4G）
- 地域活動が活発になった（4G）

家族の絆が深まった（4G）
- 家族が一緒の気持ちになれたこと（4G）
- 子供達が親友を見つけてくれたこと（4G）
- 隣人の親切にふれられた事（4G）
- 連絡の待ち合わせ場所を決めている（4G）

- 復興住宅への出前コンサートが途中（約４年後）から出来なくなった（4G）

ふれあいサロンなどが出来た（4G）
- 心癒い癒ふれあいサロンを作ることができた（4G）
- 仮設住宅でのふれあいサロンが見えなおされ全国的な広がりをみせた（4G）
- 公園を考える会を作れた（4G）
- 地域でお年寄りや一人暮らしの見守りができた（4G）
- 地域活動のネットワークができた（サロン）（4G）
- 平成九年に制度が出来た「密集住宅市街化促進事業」でまちづくり協議会を発足させ、１０年計画の３年目に入った。（4G）

自分に何ができるかと考えるきっかけになった（4G）
- 「何が出来た、出来てなかったのか」の自分なりの基準がわかりにくい。自分なりの何をすべきであったか。何ができるのか。（4G）
- 動けが遅れている為、地域でイザという時どう動けばいいのか試行錯誤（4G）

- 「救援物資を」少量集めた（4G）

家庭やボランティアで備えができた（4G）
- （２日分くらい）最低の量の水と食料はどってある（4G）
- お風呂の残り湯は次にたくまでぬけない（4G）
- 震災後ボランティア活動に携わることで、間接的に防災（イザという時の備え）を考える機会がもてた（4G）

防災意識や避難所についての情報発信が出来た（4G）
- 子供たちに防災意識を持ってもらう為にHPでライフ防災くん実施（4G）
- 宝塚市避難所マップをホームページに立ち上げた（4G）

10年間を振り返って（2004年6月6日　阪神北5）

- 家の修理復興が出来た(5G)
- 事業所の再建は出来た(5G)
- 道路の整備、外まわりの修理がだめ(5G)
- 花と緑のボランティア私は行政の仲間として花植り花作りのクループ&団体を立ち上げた。(5G)

きずなができた(5G)

- あいさつ運動ができた(5G)
- とじこもりの人と話する(5G)
- 自宅（マンション）で会う人に日々あいさつができている(5G)

風化が心配である(5G)

- 今再度被災したと声の心身のかまえが出来ていない(5G)
- 震災直後の助け合いの気持ちを持ち続けることができなかった(5G)
- 地域に自主防災に対するものが芽生えなかった(5G)
- 震災時に名古屋にいたときいくら親戚関係の話、人の話などを聞いても地震の怖さは認識できない(5G)
- 仕事の再建はできなかった(5G)

互助が芽生えない(5G)

- 一人で何何も出来ない。協力する組織がほしい(5G)
- 弱者に対するネットワーク（バリアフリーを含め）が確立されなかった(5G)
- 心の痛みをふくすようにまをつなこう(5G)
- 人的ネットワークの再建は不十分(5G)
- 名古屋の仲間に新聞テレビの情報表現で言ないが伝えることが出来た(5G)
- 老人会会員増やせなかった(5G)

10年間を振り返って（2004年6月6日　阪神北6）

防災意識が高まった。(6G)

- 関西では地震はないと思いこんでいた人（自分を含め）地震の心配はできるようになった。(6G)
- 住居の防災意識が高まった。(6G)
- 日常生活において緊急時への対応を考えて行動するようにかけてきた。(6G)
- 居住地は災害が小さかったので、準備ができていない。(6G)

- 大きな心の痛手を受けた人の心を癒すことができなかった。(6G)
- 震災10年のその次をどうするのかまだ見えてないのでは？(6G)
- さまざまな復興支援制度や施設が新たに設けられた。(6G)

災害に対する対応策が根付いていない。(6G)

- 災害時の対応が十分に考えられていない（自分も問題も。）(6G)
- 震災がおこった時、災害弱者に対してどう対応していくがまだ決まっていない。(6G)

仮設住宅等でふれあいが充実した。(6G)

- 仮設住宅の人達と触れ合えたこと。(6G)
- 市営住宅、山手住宅の人と仲良くなれた。(6G)

市民力が高まった。(6G)

- NPOが増えた。(6G)
- ボランティア、NPO等市民力が高まった。(6G)
- ボランティアに対する意識が高まった。(6G)

行政の支援を活発にしてほしい。(6G)

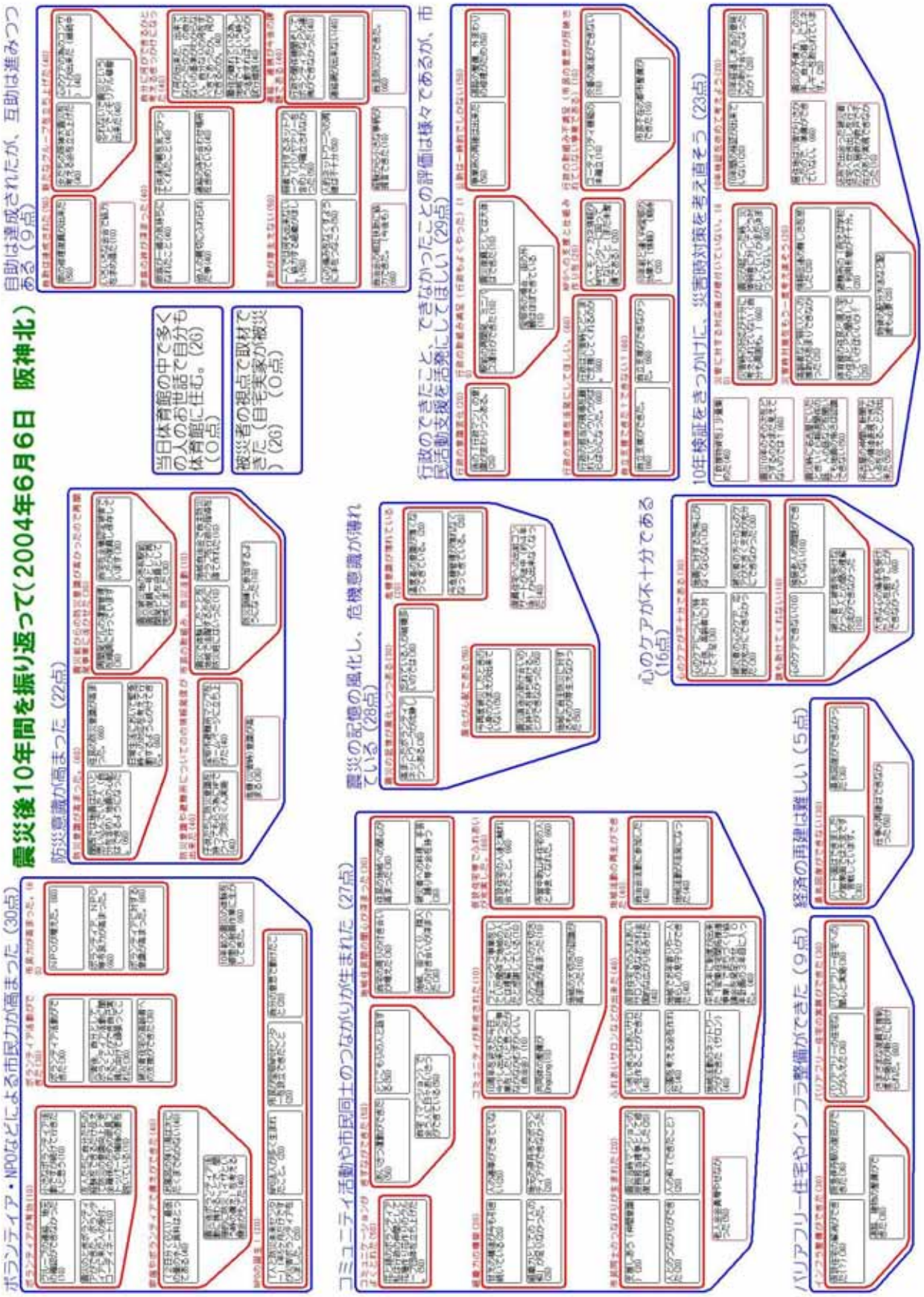
- 行政の担当が現場を離れていてノウハウがばらばらになった。(6G)
- 行政は災害時にどこまで支援してくれるのか。(6G)

- 自治会の相互扶助に協力できた。（今後も）(6G)
- 自主防災ができた。(6G)
- 10年前の震災の体験を郷里の創業作業に生かしてきた。(6G)

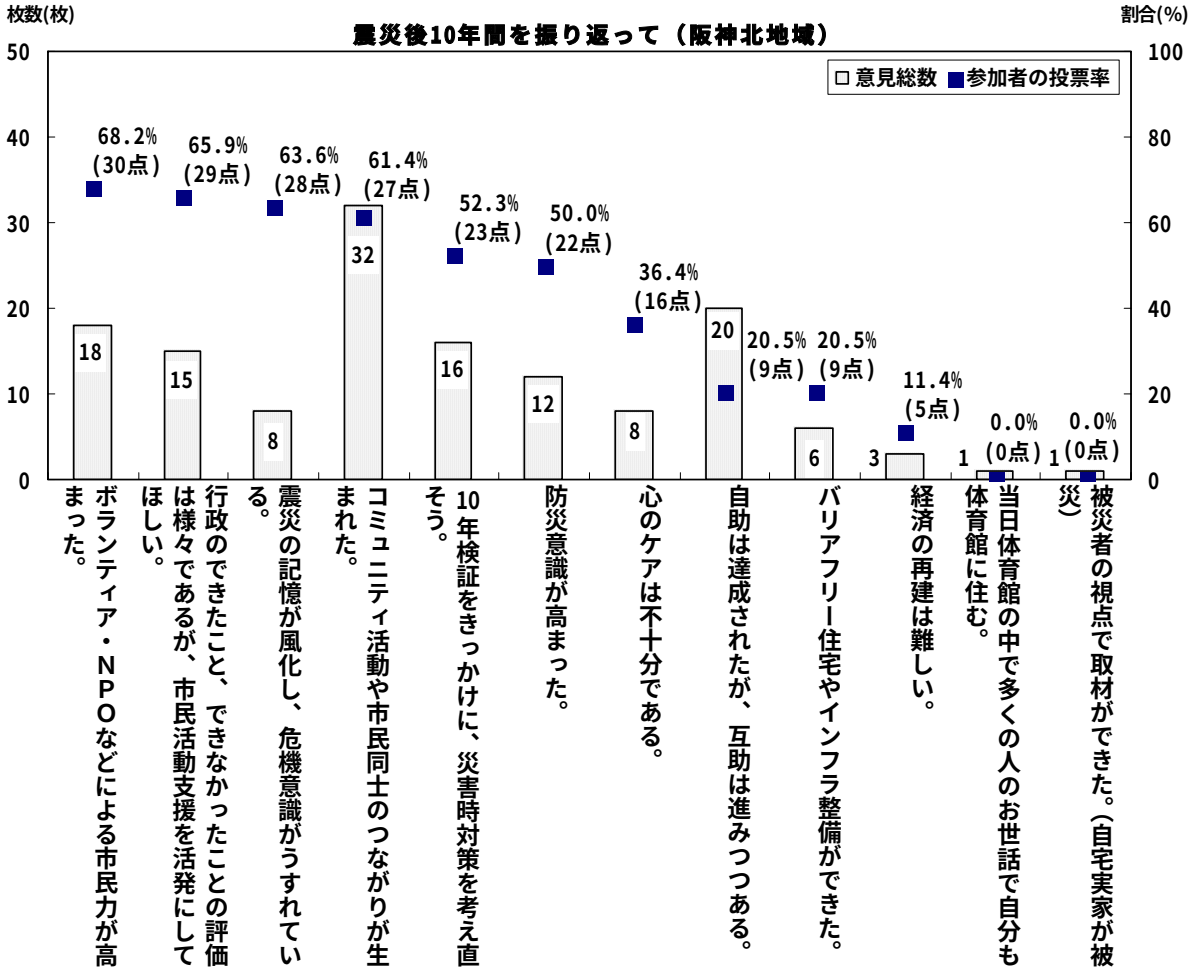
自立支援できた？できない？(6G)

- 自立支援ができた。(6G)
- 自立支援ができなかった。(6G)

・ステップ１：阪神北地域のまとめ



・「震災後10年を振り返って」について



阪神北地域の参加者44名が、会場全体でまとめた「震災後10年間を振り返って」は、大きく12項目に分類された。その中からそれぞれが重要だと思うものを５つ選び、丸シールを用いて順位付けを行った。

上図をみると、順位付けがない段階では、「コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた。」に含まれる意見が最も多かったが、順位付けの段階で、「ボランティア・ＮＰＯなどによる市民力が高まった。」、「行政のできたこと、できなかったことの評価は様々であるが、市民活動支援を活発にしてほしい。」、「震災の記憶が風化し、危機管理がうすれている。」を重要だと考えた人が多くなっている。

また、「心のケアが不十分である。」という項目の中には、「心のケア（特に子供、高齢者に対して）不足」、「地震に対する恐怖心がなくならない」など、心のケアはこの10年間では、まだまだ不十分であるという声もあった。さらに、「経済の再建は難しい。」という項目には、「ハード面はできましたが営業面では大変です。苦戦しています。」、「景気回復ができなかった」、「仕事の再建はできなかった」など、心のケア同様に経済面でも苦労しているという意見が出された。

・ステップ２：各班のまとめ

将来に向けて（2004年6月6日　阪神北１）

公・民の防災体制のさらなる「充実」(1G)

- 課題として震災に対する行政の認識と行動を高めること、安心安全な都市づくりに交番の増設(1G)
- 行政をはじめとして危機管理システムの充実を図るべき(1G)
- 自主防災意識の高揚をはかる(1G)
- 防災意識の向上をはかるために震災で得た経験を生かして公民共々積極的にとりくんでいきたい、広報活動(1G)
- 防災公園の増設(1G)

ボランティア間の「連携」(1G)

- ボランティアとして10周年になるようなことがしたい(1G)
- ボランティアニーズ把握、情報不足、ボランティア育成(1G)
- 健常者は災害時にはボランティアに積極的に参加すべきである(1G)

被災地もすでに復興はしているのでプレバブ(?)したいと思うが昔の主流の古い考えの人が多いので常識していきたい(1G)

経験を無駄にしないで(1G)

- それぞれの立場でマニュアル作り(1G)
- 阪神大震災で得た経験を基礎に将来来るであろう南海地震に対する公民共々備えを充分にする、補強、備蓄、インフラ等(1G)
- 震災で得たノウハウを生かす風土を(1G)

日頃の「ふれあい」(1G)

- 自治会がもうすこし行動していただけるように地域の拠点に活性化、共同体(1G)
- 自分の目線から他人の目線にかえてみること(1G)
- 地域でもっと交流が必要、障害を持った人も一緒に(1G)

行政、市民の「協働」(1G)

- 居住地域内に防災センターのような機能を持つ施設がほしい(1G)
- 行政から地域への業務委託(1G)
- 市民と行政との「協働」を確かなものに(1G)
- 市民の自立への「自覚」(1G)
- 福祉行政の充実、広い意味で各企業に対して助成(1G)
- 行政が主導をとること、市民の主導をとることとのそれぞれの認識の強化(1G)

将来に向けて（2004年6月6日　阪神北２）

いかにして情報を各家庭に伝えるか。正確な情報をどう集めるか(2G)

- （行政）情報の収集、発信の窓口の固定(2G)
- 早急な情報伝達(2G)
- 地域での情報伝達の方法を考え直すべき(2G)

防災マニュアルを一家にひとつ持つこと(2G)

- 各自治体別の防災マニュアルをきっちり練りく作成し、住民に周知、徹底する(2G)
- 考えてゆくことコミュニティは出来ても本当にそうなのか足元からのコミュニケーションを考えなおす(2G)

地域のことは市民が考える（行動する）ことから出発(2G)

- 「地域」という単位での防災訓練(2G)
- 市民主体のまちをつくる(2G)
- 自主防災組織の充実をはかる(2G)
- 住民一人ひとりが防災意識を常に持てるよう行政にも協力してもらう(2G)
- 地域で再び震災等に対して何をするかを考えなおす。つまり、各個の自覚を確認する(2G)
- 予想されている南海地震、県、行政では研究されているが市民での危機管理(2G)

学校義務はあるが災害弱者の情報は出すべき(2G)

ボランティアグループの連携と、組織化できるよう防災マニュアルの中に入れる(2G)

- ボランティア組織（NPO法含む）の統一。（指揮命令系統）(2G)

震災を忘れないで！今後に生かす(2G)

- 震災によって奪われた思い気持ちは大切にしなければならない(2G)
- 震災を風化させないための語り部となること(2G)
- 震災を忘れないこと(2G)
- 人間関係がサッパリとした今日、人と人との交わり、大人と子供との交わりをもっと広く、地震で体験したことを含めて人々に伝えていく必要がある(2G)
- 体験の温度差、国の事情によりちがっているが人が生きるということにおいて基本は同じなので話し合う(2G)

ボランティアとリーダーの育成強化(2G)

- 多くの被災に向けグループリーダーの育成(2G)
- ボランティアのかかわり方も大きな変化があり、年齢層にも違ってきている(2G)

防災の国際的ネットワークを持とう(2G)

- 地震の多い国々と連絡をよくとって全世界的な防災システムを検討する(2G)
- 世界規模にたった情報交換と一緒になった考え、医療、福祉、安全を考える(2G)

将来に向けて（2004年6月6日　阪神北3）

将来に向けて（2004年6月6日　阪神北4）

将来に向けて（2004年6月6日　阪神北5）

コミュニティつくりを進める(5G)

- みんなが助け合いをさらに進める(5G)
- 芽生えたボランティア精神を大きな輪にしたい。(5G)
- 現代社会ですくなくなったコミュニケーションの復活を地域から実行したい(5G)
- 仲間作りをはかろう。助け合いの出来る隣近所の人との仲間作りをする(5G)
- まちづくりのコミュニティ組織を国の前進させたい(5G)

体験を次世代に語り継ぐ(5G)

- いつどこでどんな災害があっても人として行動できるように気持ちを持ちたい(5G)
- 人の命の大切さをもっと知る(5G)
- 人生を通して震災の経験を人に伝えたい(5G)
- 体験の語り部的な存在を続けていきたい(5G)

心のふれあいを深めよう(5G)

- ふれあい喫茶などを続けていけたら・・・(5G)
- 環境作りを意識した計画（自然人の心を作る）(5G)

次の震災の備えに生かそう(5G)

- 現在の点的整備の間のゾーンを整備し将来の防災に備える(5G)
- 次なる災害が起きたとき に備える（南海沖地震）(5G)

家、家財の強度は大丈夫か(5G)

- 建具が倒れないようによい方法を考える。(5G)
- 完成したカード（建物や再開発など）を将者を配慮したパリやフリーでつないでいく(5G)
- 具体的にどのような家ならば震災に耐える基準の開示してほしい(5G)

強い町作りをしよう(5G)

- 震災を町作りに生かしていきたい(5G)
- 日本の技術力を世界のに貢献すること(5G)
- 福祉、弱者を意識した防災記念塾のハード作り(5G)
- 食の確保各家庭で一人30食のラーメンを確保する。強制的にする(5G)

将来に向けて（2004年6月6日　阪神北6）

情報の共有と公開をしていく。(6G)

- （世界に向けて）震災情報の・公開・共有化をさらに進める。(6G)
- 災害復旧への貢献力を発揮していく。(6G)

体験者として提案、提唱していく。(6G)

- 記録、検証をしっかり行い、マニュアルを残す。(6G)
- 災害に強いまちづくり（倒れは樹木の生垣等）の提案をしていく。(6G)
- 災害時に障害を持っておられる方へのどんな対応が必要か。(6G)
- 都市の災害に対応する。(6G)
- 役に立ったグッズなどの生活者レベルの提唱をする。(6G)

ボランティア、ＮＰＯの意義を高める。(6G)

- ボランティア、NPOに対する認識を持つ。立木ゼミは大丈夫？？(6G)
- ボランティアする側も受ける側も意識を高めるべき。(6G)

ＮＰＯ、ボランティアの効果的なサポートを実現してほしい。(6G)

- NPO、ボランティアの効率的活動ができるシステム作り（地元他地域へのはたらきかけ方）(6G)
- 活動には物、人、金が必要であるが、果はどのようにお考えでしょうか？(6G)
- 震災で生まれた「ソフト」面の変化を伝える（NPO、ボランティア）(6G)
- 防災意識の拡充、高まり。(6G)

住居の入れ替わりがあった。(6G)

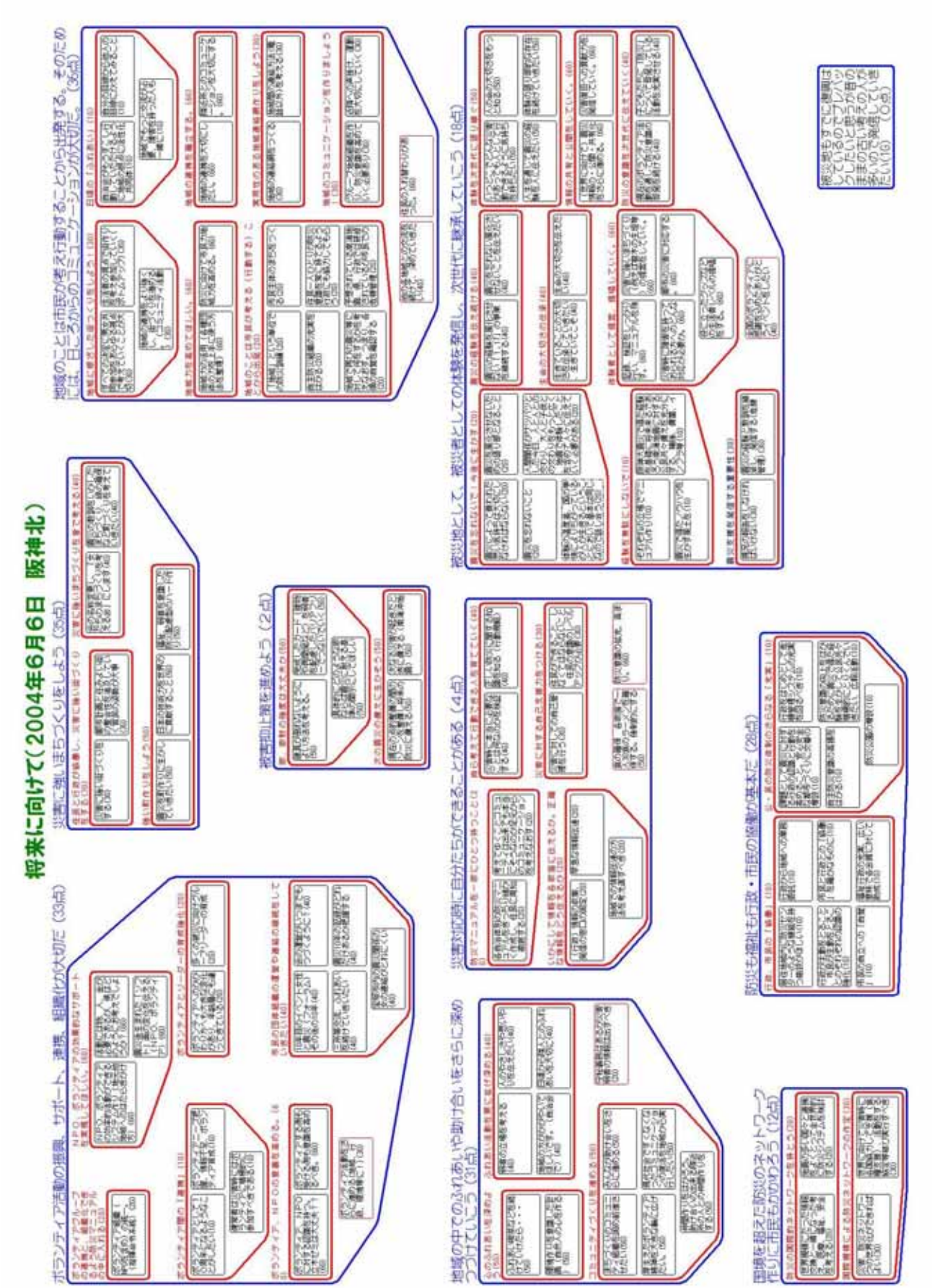
地域力を高めてほしい。(6G)

- 防災に向けて市民力地域力を高める。(6G)
- 地域力の活用（各種団体の力を上手に使う方法を整理）(6G)

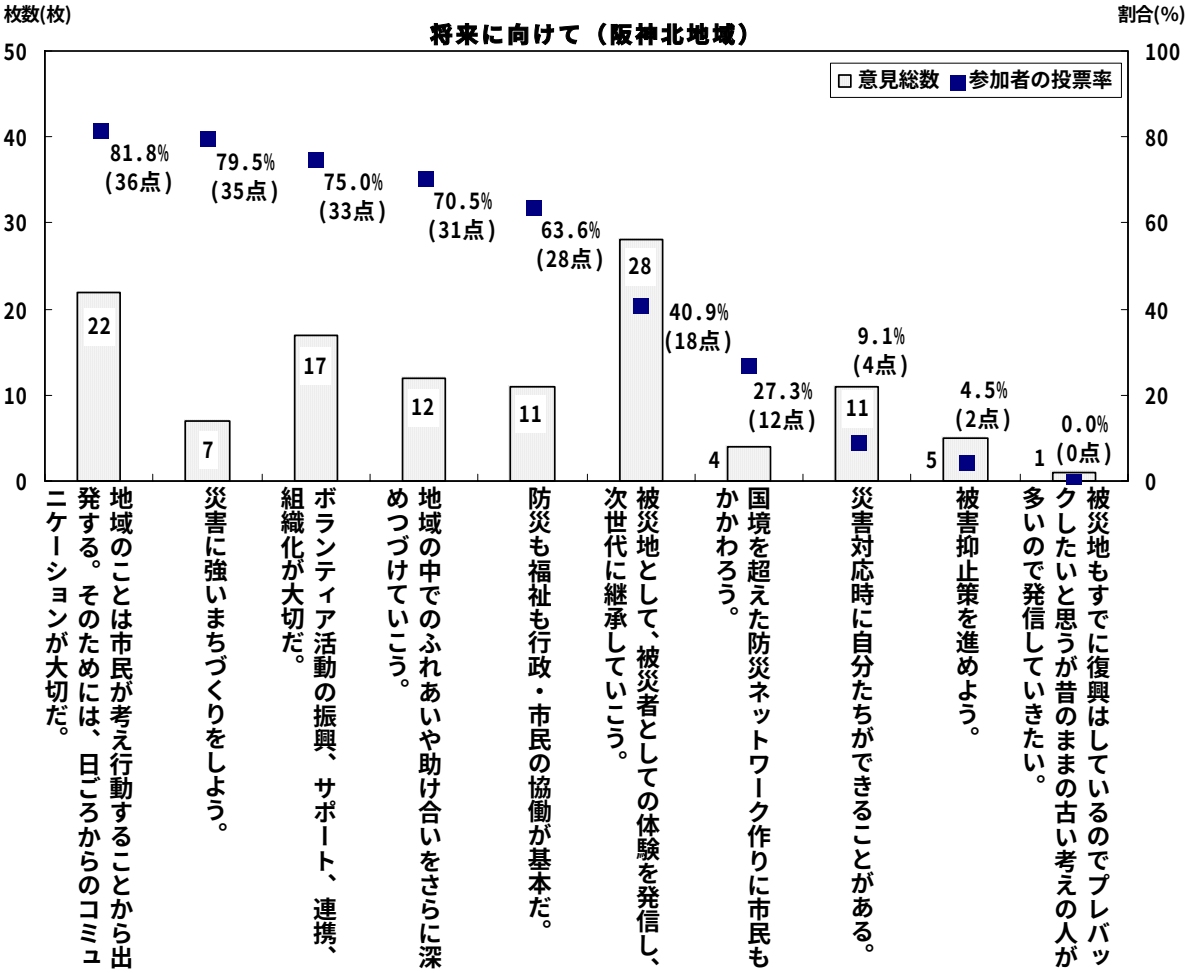
地域の連携を確立する。(6G)

- 地域の連携を大切にしたい。(6G)
- 隣近所とのコミュニケーションを大切にする。(6G)

・ステップ２：阪神北地域のまとめ



・「将来に向けて」について



会場全体でまとめた「将来に向けて」については、大きく10項目に分類された。その中からそれぞれが重要だと思うものを５つ選び、丸シールを用いて順位付けを行った。

上図をみると、順位付けのない段階では、「被災地として、被災者としての体験を発信し、次世代に継承していこう。」に含まれる意見が最も多かったが、順位付けの段階で、「地域のことは市民が考え行動することから出発する。そのためには、日ごろからのコミュニケーションが大切だ。」、「災害に強いまちづくりをしよう。」、「ボランティア活動の振興、サポート、連携、組織化が大切だ。」を重要だと考えた人が多くなっている。

また、「災害対応時に自分たちができることがある。」という項目の中には、「食の確保、各家庭で一人30食のラーメンを確保する。」というような具体的な意見もあった。